

音は語る

文 藤盛一朗

連載 52

ヴィオッティ、権代敦彦、PMFオーケストラ 演奏や初演作に宿る平和希求のメッセージ

ロレンツォ・ヴィオッティは、東京交響楽団の音楽監督就任後、短期の間に実に多様なレパートリーを聴かせている。ベートーヴェン、マーラー、R・シュトラウス、ラヴェル、ドビュッシー、リムスキー＝コルサコフ。そのどれもが作曲家固有の世界に深く入り込んだ表現と感じさせる。ブラームスの交響曲第3番の演奏は、その典型だった（7月18日、サントリーホール）。

柔らかな身ぶりから温かな歌

ブラームスの3番は、指揮や演奏の力量が問われる難曲である。サントリーホールの下手後方の客席から見た指揮の身ぶりは、実に分かりやすい。第1楽章は、柔らかく、大きく

く。出てくる音楽は、マエストロソでありながら、いかめしくも鋭角的にもならない。イメージを言葉にするなら、秋の陽の光が注ぐ山間の風景。燦然と輝くのでなく、そこにいる者をじわりと温める。木々を枯らし、凍てつく冬の予感も漂わせながら、滋味豊かなブラームスの音楽が続いていく。

奏者の自発性にも信頼を置く。第1楽章の世界の延長のように第2楽章は始まり、クラリネットの奇しきドルチェは、手を下におろして委ねる。旋律に応える弦の響きはおのずろけ合い、感興が増す。第3楽章も、わびしさというより、大きく温かな歌が保たれる。

ヴィオッティの指揮は、北ドイツ



ブラームスの交響曲第3番を指揮するヴィオッティ ©T.Tairadate

終わりはくる。そのことを包み込むような温かさが感じられた。
後半のドヴォルザークでは、指揮は一転してリズムや強弱のコントラストを強調し、スラブの民族音楽としての交響曲7番を聴かせる。ブラームスとの差異を際立たせるヴィオッティには、小国のチェコの歴史や民族性を尊ぶ姿勢が当然ある。自国主義の無制限な拡大と命の破壊が広がる現在の世界状況とは対極の、豊かな個性と独自性、そして多様さが尊ばれるべきだというメッセージすら宿していた。

破壊の後の平和創造の意志

権代敦彦の最新作《カンタータ「愛」…地に》オーケストラ、合唱、オルガンのための《は、原爆投下の主題が創作の出發としてある。その平和の祈りは、特別な「声」と化した。山下一史の指揮する愛知室内オーケストラは、第100回の記念すべき定期演奏会で、岐阜県多治見市の多治見少年少女合唱団とともに表現の限りを尽くし、この傑作を世に送り出した（7月31日、愛知県芸術劇場

コンサートホール）。

合唱が初めに繰り返すカントダウンは、被爆への過程を示す。今は世界が文字通り、破滅の淵に立っていることを想い起こさせる。大太鼓が各1台、左右に配置され、合唱、パイプオルガンとともに、分厚い音を創り出す。

第2楽章は「どん底から」の副題を持つ。長崎で被爆し、妻を失った医師の永井隆の言葉「どん底に大地あり」からとられた。原爆投下後の破壊の風景だが、永井と同じカトリ

ック教徒の権代は、イエスの十字架の道行を音楽に重ね合わせ、暴力と死に覆われた世界の向こうを見つめようとする。

地から視線を上には上げるように、上行音型が現れ、第3楽章では、合唱が「ソラ」と繰り返す。多治見少年少女合唱団と関係の深かった合唱指揮者、田中信昭が終戦の日に見上げた「真つ白な空」のイメージがそこにある。第4楽章は、「空」が転じて「空」であり、「空しさ」。旧約聖書のコヘレトの言葉「すべてはむなし」が基層にある。

終楽章の第5楽章は、「Agnus Dei——平和の賛歌」。ここでこの曲は、ミサ曲の祈りの音楽であることが明確となる。「世の罪を取り除く神の小羊」の罪（ペカンタ）という言葉が繰り返され、憐れみを願う歌詞は、平和の懇願となる。パーチェム（平和を）の連呼は、ベートーヴェンの《ミサ・ソレムニス》を思わせ、争いのたえない現実世界を暗示する小太鼓の連打も響く。オルガン（大平健介）と合唱の響きは、ホールを大聖堂に変えた。

作品は愛知室内オーケストラの委嘱作であり、権代はレジデントコンポーザーとしての共同作業をこの作品に実らせた。決して1回限りでなく、国内はもとより、海外でも演奏

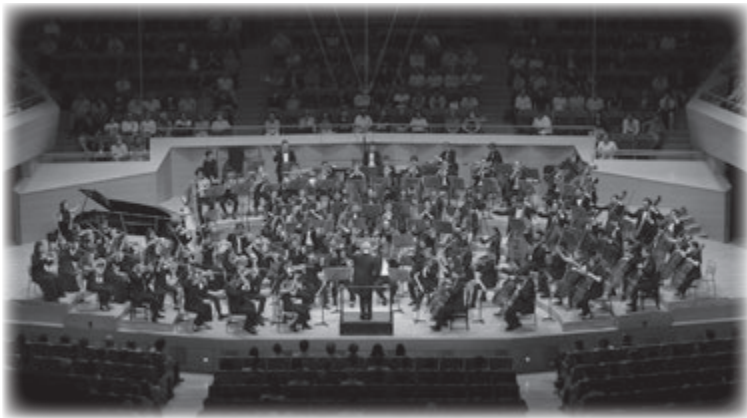
されるべき作品であるとの思いを強くする。多治見少年少女合唱団のメンバーは、最終に向け、客席に下りて歌った。平和創造はお題目ではない。生きている者が共同で作り上げるもの。権代の思いは、視覚的にも明確となった。

27力国・地域の若者が参加

札幌の国際教育音楽祭、PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌）は、36回目となる今年、北海道内で27公演を行い、東京公演も行われた（7月27日、サントリーホール）。バーンスタインが死の直前、平和と教育の理念を掲げ1990年に創設。渾身の力を振り絞ってシューマンの交響曲第2番を指揮したことでとも知られる。今年は27力国・地域の若者92人（オーケストラ演奏は89人）が参加し、パレスチナ人のウィーン・フィル・コンサートマスター、ヤメン・サーディヤ、ベルリン・フィル奏者らの指導を受けた。

PMFオーケストラの東京公演は、吉本梨乃がソリストを務めたベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲も聴きごたえがあったが、「宇宙船地球号」という言葉をより実感させたのは、後半のプロコフィエフの交響曲第5番だった。

奏者たちは、コンサートマスター



プロコフィエフの交響曲第5番を演奏するロバートソン指揮PMFオーケストラ（パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会提供）

をはじめ米国で学ぶ者が優勢。韓国勢も目立つが、ベネズエラやコスタリカ、キューバといった中南米からのほかトルコやウズベキスタンからの参加者もいる。音楽的背景や教育がさまざまなあっても、英国の指揮者、デイヴィッド・ロバートソンの指導・指揮と、ファカルティ陣のサポートを経て、音色には見事な統一感が生まれていた。戦時下の旧ソ連での作曲という歴史を離れ、その合奏からはヒーマンな声として、平和を希求する意志が聴こえた。

■